

ハリエット・マーティノウの経済思想—産業・労働・モラル

武蔵大学 総合研究所 研究員

船木恵子

1. 報告の目的

本報告では、ハリエット・マーティノウ(1802-1876)の経済思想を、1820年代から1850年代までの著作を対象に考察する。まず(A)マーティノウの思想的背景と受容した教育について論じ、つぎに(B)家庭環境と聴覚障がいから作家の道を歩み始めた1820年代の「ファクトリー・ノベル」、*The Rioters*(1827)と、その延長線上にある『例解・経済学』シリーズ(1832-34)の25巻「多くの寓話のモラル」を考察する。(C)ジャーナリズムに転じた1840年代から50年代の『工場論争』(1855)を扱い、1850年代以降のマーティノウの経済思想の特徴を論じる。(D)最後に本報告におけるハリエット・マーティノウの経済思想を(A)から(C)までを総合的に考察し、マーティノウの経済思想を明らかにする。

2. (A) ハリエット・マーティノウの思想的背景と教育

ハリエット・マーティノウは1802年にイングランドのノリッチでトマス・マーティノウの8人兄弟の6番目の子として生まれた。生家は織物工場を経営する中産階級で、フランスから移住してきたユグノーの家系である。男女平等の教育はユニテリアンの学校の特徴であるが、マーティノウはノリッチのユニテリアン主義の共学校でラテン語、フランス語、英語という基礎教育を受け、1818年、16歳の時にブリストルの牧師ラント・カーペンターの設立したユニテリアンの専門学校で哲学的な教育を受容した。弟のジェームズ・マーティノウ(1805-1900)もこの時同時に教育を受け、後に著名な牧師になっている。彼女はラント・カーペンターからデヴィッド・ハートリーのジョゼフ・プリーストリーが編集した *Observation on the Man* をテキストとして学んだ¹⁾。このテキストはこの理論に対抗するものとして、しばしばスコットランド常識学派(Scotch school)を批判しており、マーティノウはこの学派に興味を持ち、プリーストリーのスコットランド常識学派への軽蔑にもかかわらずデュバルド・ステュアートの魅力に取りつかれたと『自伝』で述べている(vol.1-105)。これは若きマーティノウがハートリーの観念連合説を受容し、必然論(決定論)の立場を徹底的に教育されながらも、スコットランド常識哲学の道德感覚に心引かれていたことを意味する。『例解・経済学』において、自然法則的に論じられる規範(モラル)としての経済学(特にサマリーの部分)と、作品中に登場する多様な国や階級、ソサエティの人物たちの様々なマナー(行動様式)の併存という構成は、こうした複合的な哲学的背景によるのではないかと推察する。

さらに哲学的背景として重要なことは、1850年代以降はマーティノウがコントの影響に

¹⁾ マーティノウの自伝によれば、D.ハートリーの *Observation on the Man* のプリーストリー版は物理学的な「振動の理論」を除いたので、心理学的なアソシエーションズムをはっきりとさせることに役立ったという。(自伝1巻 p.103)

よって実証主義の立場をとることである。マーティノウは 1851 年にオーギュスト・コントの『実証哲学講義』(*Cours de Philosophie Positive*)を読んで感動し、ただちに英語に翻訳する。ここから始まる彼女のコント哲学への熱中はイギリスにおける最初のコントの『実証哲学講義』の抄訳となる。1850 年代以降の著作には『例解・経済学』で実行したような規範的な経済学(マーティノウの場合は古典派経済学)を用いるのではなく、実証的なテーマを用いるようになる。

3. (B) *the Rioters*(1827)における経済思想

ハリエット・マーティノウの父の事業は 1825 年の恐慌の影響で悪化し、父は心労と過労で死に、家は破たんした。この恐慌は英国で最初の生産過剰による恐慌だったが、マーティノウの『自伝』にも銀行が破たんし、商品が全く売れなくなりどうすることもできない状況が描写されている。働ける子どもたちは家族のために外に出て働いたが、聴覚障がい者の彼女はそれができなかった。彼女はひそかに作家になることを決意しており、応募論文が受賞したことから小さな仕事を得るようになった。そのころ書いたのが *the Rioters, or a Tale of Bad Times*(1827)である。この小説は作者の名前すら印刷されない小さな本だったが、ラッドライト事件のイメージで書かれた機械打ちこわし運動をテーマにしたこの作品は『自伝』によれば傾きかけた出版社を再生させるほど成功したという。この著作の前半において、機械の導入は労働者の雇用を永久に奪うか否かという議論が述べられている。そして機械の導入は親方や労働者、最終的にはイギリス国民全体にとって利益になるのかどうかという問題を扱う。

問題は新機械導入でリストラされた労働者が、いずれすべて再雇用されるかどうかである。ここでは手織機工がリストラされて暴徒となって工場を集団で襲うことが描かれるが、じつは彼らの一部が動力織機工として再雇用されていることが述べられている。しかしリストラされた人員がすべて雇用されるわけではなく、景気動向によって雇用が不安定化することが社会的な貧困をもたらすのであり、直ちに解決されなければならない問題であることが、ストーリー展開から意図されている。さらに物語後半は、暴徒として暴力で機械を破壊し、当局にとらえられた労働者は、当然裁判にかけられるが、当時の世論においては、労働者が同情されるという雰囲気があった。しかし英国社会におけるモラルとマナーは、機械導入で希望を失った労働者の若者たちが暴徒化するのに同情はあるだろうが、その議会制民主主義で決めた規範であり、その社会の人々の合意で成り立っているもので、法を順守しなければならないというものである。この小説のテーマと結論は、その後のマーティノウの同様の著作に共通している。*the Rioters* はほとんど会話形式の小説で、登場人物はマンチェスターに商売でやってきたビジネスマン「私」と、リストラされた労働者家族である。暴動に加担した父親ブレットと「私」の二人の会話の要点をあげると、以下にまとめられる。

- ①ナポレオン戦争後の好景気と現在の過剰生産による不景気の今後の見通しについて
- ②国際競争の激化と英国の優位の理由。動力織機の導入と手織機工の解雇とその将来

③多くの解雇された職工がワークハウスに行かざるを得ない現実をどうするのか

④過剰生産は解消されても、雇用は回復するのか否か

「私」は不況が一時的だと主張する。貿易をすれば世界中に供給されるからタイムラグはあるが必ず商品は売れ、労働者の失業は解消するはずだという。一方ブレットは再雇用されるかどうかは疑わしいという意見があると問いかける。そもそも動力織機の導入で人間の労働力はどんどん必要なくなるはず。機械がなければ失業はないはずだ。打ちこわしは必要だという。これに対して、「私」は国際競争に勝つには動力織機は不可欠である。わが国で廃止すれば、他国に技術と技術者がわたる。他国で我が国の技術と能力が使われ、さらに我が国から流出した技術と技術者が外国でもっと優れた製品を開発し、開発をやめた我が国は市場競争から撤退し、没落する。国民は今よりもさらに貧しくなると「私」は主張し、今機械を破壊することが労働者の雇用を守る最善の方法だと主張するブレットを説得する。

この議論は当時経済学者の間で議論されていた機械論(リカードゥ経済学にはじまる)と、マーティノウの市場観が融合したものである。マーティノウの考えは機械の普及による一時的生産過剰は、国際貿易において必ず解消される。失業は一時的で、雇用も技術革新によってタイムラグはあってもかならず回復するというものである。ただしこの場合、労働者の新技術への適応と職業転換は必ず必要になるという。

4. 『例解・経済学』(1833-34) 第25話「多くの寓話のモラル」(以下「寓話のモラル」)

シリーズの最終巻であり、マーティノウの経済学テキストのまとめとなる。目次タイトルとシリーズの一覧を以下に示す。「寓話のモラル」はジェームズ・ミルの『経済学綱要』にならい4分法で構成している。ただしこのシリーズの一話ごとにつけられたサマリーをまとめただけではない。24話の各内容が加味され、それに歴史的事実や時事的な事項も加えられている。つまりシリーズ最後の「寓話のモラル」は、『例解・経済学』における寓話が現実の社会問題を暗示していたことを示している。このシリーズは、子どもには物語であり、大人には社会問題を寓話化して「鳥瞰図」のようにわかりやすく見せることによって、そこに経済法則が働いていることを説明したものであることがわかる。ただし、「寓話のモラル」においては経済学と、現実の問題が混ざりあい、理論と現実に整合性を欠く部分があり、完全に成功しているとはいえない。そこで「寓話のモラル」を一つの論文として理解すると、各パートにそれぞれテーマが主張されるが、特に分配論において、労働者と資本家の協働の重要性を主張していることが理解できる。労働者の結合は、親方とのコンビネーションを考慮すべきであることが強調される。以下の表の太字の2話(「丘とゆり」「マンチェスター・ストライキ」)は *the Rioters* と内容的にも、思想的にも連続性がある。つまりマーティノウの意図する労働者のマナー(行為)は、暴動という違法行為ではなく、協働というモラルにかなったものでなければならないのである。そのため彼女は発明と開発に多額の資本と努力を要した紡績機開発の歴史を長々と説明したうえで、快適な改良に対しては「多くの人々は支払いをしたいものである」(p.61)と論じ、産業化を奨励する。

the Rioters の前半部分と結論はほぼ同一である。産業の発展、労働者と資本家の結合による高賃金と社会発展、技術革新と市場競争の重視、知識の普及が結論される。また彼女の労働者に必要とされるモラルは保護ではなく、労働者教育の普及である。与えるだけの保護は必要ないが、労働者に意欲と教育を与える支援は、公であってもチャリティであっても必要であると考えている。

[The Moral of Many Fables (1834) Contents] (最終巻 25 話の目次)

Part I	Production	1. Large Farms	2. Slavery
Part II	Distribution	1. Rent, Wages, and Profits	2. Combinations of Workmen
		3. Pauperism	4. Ireland
			5. Emigration
Part III.	Exchange	1. Currency.	2. Free Trade
		3. Corn Laws and Restrictions on Labour	
Part IV	Consumption	1. Taxes	
Conclusion			

[1832]		<i>Illustrations of Political Economy,</i>	
vol. 1	1	<i>Life in the Wilds</i>	(wealth consist of commodities) South Africa
	2	<i>Hill and the Valley</i>	(Machinery, Capital) South Wales
	3	<i>Brooke and Brooke Farm</i>	(Labor and Capital) not England
vol. 2	4	<i>Demerara,</i>	(The increase of population, capital) west India
	5	<i>Garveloch tales(1)</i>	(The increase of population, Malthus's theory)
	6	<i>Garveloch tales(2)</i>	Scotland's Island
vol. 3	7	<i>Manchester Strike</i>	(Joint property of Capitalist and Laborer)
	8	<i>Cousin Marshall</i>	(Poor Law, What is charity) workhouse
	9	<i>Ireland</i>	(Ireland problem)
vol. 4	10	<i>Homes Abroad</i>	(Voluntary Emigration)
	11	<i>For Each and For All</i>	(Production, Labor and Capital)
	12	<i>French Wines and Politics</i>	(Value, use and exchange)
[1833]			
vol. 5	13	<i>Charmed Sea</i>	(Exchange Money)
	14	<i>Berkeley the Banker Parts 1</i>	(Bank Paper, gold money, Paper money)
	15	<i>Berkeley the Banker Parts & 2</i>	
vol. 6	16	<i>Messrs. Vanderput and Snoek</i>	(the latter half of the 17th century)
	17	<i>The Loom and the Lugger Parts1</i>	(Exchange, foreign trade, 17C, Dutch)
	18	<i>The Loom and the Lugger Parts & 2</i>	

vol. 7	19	<i>Sowers not Reapers</i> (exchangeable value, cost of production)	Yorkshire
	20	<i>Cinnamon and Pearls</i>	(Colony trade) East India Company
	21	<i>A Tale of the Tyne</i>	(The duty of Government)
[1834]		(Preface: Feb.1834)	
vol. 8	22	<i>Briery Creek,</i>	(productive unproductive Consumption)
	23	<i>The Three Ages</i>	(Liberal provisions for the advancement)
vol. 9	24	<i>The Farrers of Budge-Row</i> (<i>Tontine annuity, war, the debt, and loans</i>)	
	25	<i>The Moral of Many Fables</i>	(essay)

5. (C) 1850年代の経済思想—『工場論争』(1855)

1850年代の重要な点として、前述の1851年代以降のマーティノウの社会分析の方法の変化である。その理由は1.コント哲学の受容(コントの実証主義) 2. 社会や国民の観察方法の確立である。これは著作 *How to observe moral and manners*(1838)で述べられている。マーティノウはモラルの原則とマナーの規則は国民性や国家やその社会によって相違し、ある社会で悪徳であること(たとえば嘘をつく、人のものを取るなど)が、他の社会では悪徳ではないと社会認識されることはよくあることであり、国民性の違いとして一般的に述べられている。しかしこれは科学的に分析する領域(社会学)であり、歴史や社会制度と大きな関係を持つ。こうした意図からマーティノウはソサエティのモラルの原則とマナーの規則を科学的に分析する方法をここで著した。この研究の前提は『例解・経済学』にあるが、アダム・スミスの『道徳感情論』の影響を受けているように思われる。冷静で利害のない観察者が先入観なく「観察すること」で国家や国民、ソサエティの規則、法の正確な理解ができるとのべている。マーティノウは必然論とは決別したが、批判的に学んだスコットランド常識学派の影響は最後まで残されたのではないかと考える。

これ以後に書かれた『工場論争』(1855)は、前提として彼女が1851年にウエストミンスター・レビューにある若者(コレラで死んだ)が書いた「政府の適切な領域と義務について」の論文に同感し、改めて同じウエストミンスター・レビューに同様の論文を書いたところ、編集者が承諾したにもかかわらず、内容の修正を要求された。マーティノウは修正を拒否した。論点は

- ①論文中で著名な工場監督官レナード・ホーナー²⁾を批判したことに対して編集者は受け入れられないとした。マーティノウの主張は、著名なチャールズ・ディケンズやホーナーは、労働者階級に同情的であり、彼らは政治家に利用され、正確な記述をしていない。現実の状況を観察と分析をして報告する義務があるのに、この原則を果たさずに著述することで社会に過剰な労働者保護の雰囲気をつくりだしている。
- ②イギリス全土の工場の動力シャフトに、多額の設備費用がかかるカバーを義務づけるといふ法律は、工場監督官の事故の報告書に世論が過剰に反応し、それに気を遣う政府の

²⁾ マルクスが『資本論』の中で評価した工場監督官。

ゆきすぎた干渉に過ぎない。その事故の報告書は正しいとは思われない。
この論文は結果としてマンチェスターの親方組合を擁護するものとなった。しかし保守的で、資本家の利益を擁護しているようにみえるが、マーティノウの論点をたどると、労働者
と親方(資本家)との結合を重視するマーティノウの経済思想が見える。ホーナーの報告書を
再検討し、誤りを指摘し、政府が扇動的な世論に動かされて過剰な干渉をすることは、英国の市場競争力の低下をもたらす労働者保護にならないと述べる。特にディケンズに対して厳しく、彼は小説で世論を扇動し、労働者保護を訴えるが彼の主張は「小説に過ぎない」
のだとフィクションが世論を動かして資本家と労働者の不利益を招いていると批判する。
マーティノウは事実分析を欠いたフィクションがモラルに影響を与えることを否定する。

6. (D) 結論

本報告では1820年代から1850年代の労働問題に関するマーティノウの経済思想を対象に、(1)マーティノウの経済思想が初期の哲学的教育の影響に基づいて展開したこと、しかし(2)『工場論争』(1855)に代表されるように1850年以降はコント哲学の影響や「モラルの原理とマナーの規則」(国民性の理論)の影響を受けて実証主義に転じたこと、しかし方法の変化はあっても(3)マーティノウの経済思想に一貫する部分があるということのべた。それは労働者と親方(資本家)共通の利益が経済発展を導くという強い考え方である。この実現には政府の過剰な干渉や感情的な保護は必要なく、支援すべきはモラルに基づく両者の自由な主体性と知的(技術)発展を援助するのみであるという古典的自由主義の考え方が主張されていることを論じた。

[参考文献]

Martineau H, 1827. Rioters; or A Tale of Bad Times.

Wellington, Salop: London: Printed by and for Houlston and Son

———. [1832-34] 2001. Illustrations of Political Economy. Taxation.

Poor Law and Paupers vol.1-9. UK, Tokyo: Thoemmers Press, Kyokuto Shoten.

———. 1838. How to observe Moral and Manners. London:

Charles Knight.

———. 1855. Factory Controversy; A warning Against Meddling

Legislation. Manchester: The Factory Controversy; A Warning Against Meddling Legislation. Manchester: The National Association of Factory Occupiers.

———. Edited. Chapman, M. [1877].2010. Harriet Martineau's

Autobiography.vol.1.2.3. edited by Maria W. Chapman: New York:

Cambridge University Press.